

# 妖怪 司馬遼太郎



---

---

ようかい  
妖怪

しばやうなろう  
司馬遼太郎

© Midori Hukuda 1973

1973年2月15日第1刷発行

2005年7月15日第78刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——株式会社まゆら美研

印刷——株式会社廣済堂

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部  
あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えし  
ます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文  
庫出版部あてにお願いいたします。

**ISBN4-06-131151-4**

---

---

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

# 妖怪

司馬遼太郎

講談社



目次

|       |     |
|-------|-----|
| 京へ    | 四三  |
| 花ノ御所  | 一一一 |
| 兵法    | 一八〇 |
| 唐天子   | 三三一 |
| さわらび  | 三〇三 |
| 遠近、   | 四〇五 |
| 藪のあたり | 四五〇 |
| 富子    | 五〇九 |
| 沖ノ島   | 五六五 |
| 三条河原  |     |

|     |     |     |     |     |     |     |     |    |   |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|---|
| 五六五 | 五〇九 | 四五〇 | 四〇五 | 三〇三 | 三三一 | 一八〇 | 一一一 | 四三 | 七 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|---|

北小路殿

解説

年譜

尾崎秀樹

五八七

六三〇

六二九

# 妖 怪



## 京へ

## 一

この時代にはこんなやつがいた、というはなしである。  
この時代とは、

際限のない戦乱と一揆

慢性化した飢饉

都における無警察、無秩序、頹廢

土民の擡頭

室町將軍家のひとり栄華

といったふうの時代で、室町の頹廢期といっていい。有名な応仁の乱よりややさかのぼって十数年前といったところが、この「源四郎」の青春期だった。

「ばかっている」

と、ある日、源四郎はにわかに熊野の山中でおもった。このときから、行動がはじまった。

「都へ出て、將軍になろう」

むろん、正気である。

この若者のうまれた熊野は紀州半島の南を占める大山塊で、高峰が連立し、溪は深く、溪流は早く、山あいには湯が湧き、霧はつねに青く、古来、行者の行場とされている。

母は、遊女であつた。

もとは熊野本宮の巫女であつたらしいが、多くの巫女がやがてはそうなるように、山の遊び女になつた。

熊野は、これほどの山中でありながら、都の者がこれほど詣でる場所もない。王朝のむかしから、

—— 蟻の熊野詣で

といわれ、天子をはじめ京の貴族が何百人の供をつれてこの熊野に詣でるのがすたりのない流行とされてきている。参詣者が山坂を蟻のようにつらなつてゆくところから蟻の熊野詣でといわれたのであろう。

そのための遊び女も多かった。遊び女たちはよく子を宿した。このため熊野では貴族の落胤が多く、たとえば源平のころに活躍する頼朝・義経の叔父新宮十郎行家は、源為義が熊野で遊び女にうませた子である。

山には、そのたぐいの者が多い。

牛鬼峠には「大納言の子」というきこいもおれば、那智山には「少将のむすめ」という遊女もいる。

そのなかで源四郎は、

## 「室町將軍六代足利義教公の落胤」

ということになっていた。それを若いころから騒がしく唱えているのは母親の萱だったが、むろんなんの証拠もない。ある年の夏、都から武家貴族がおおぜいきた。そのうちのもっとも尊貴な人物の夜伽を萱がしたというのだが、それだけのことである。たしかにその人物こそ足利一族だったというのだが、それがのちの義教將軍であるかどうかは疑問であつた。

「たしかにそうじゃ」

と、萱は源四郎の幼児のころからそのように教えてそだてた。

それだけが、母親の遺産である。

その母親が死に、源四郎は弟切峠の上にある墓場まで背負って行つた。穴を掘り、そのなかへ母親のからだを落しこんだ瞬間、源四郎はひと声、鳥がとびたつほどの大声で泣いたが、しかし土をかぶせたときにはもう目がすわっていた。

「都へ出て、將軍になろう」

とつぶやいたのは、このときである。

その日は、小屋にもどつて寝たが、体中の血が酢になったようで、ねむれたものではなかつた。

二十二年、母親の萱とこの小屋でくらししたが、その母親はいまはいない。

「なんということだ」

源四郎は寝わたのなかから瞼をつりあげて小屋のなかを見まわした。壁にかかったミノや古びた菅笠、いろいろ、その上の鍋、なにかもが、母親の死とともに呼吸をとめてしまったように白

ばつくれている。

「うぬらも、浄土へ行つたか」

と、源四郎はつぶやかざるをえない。母親の生活とともにあつたそれらは、母親がこの世を去るとともにそれらの魂も供をして冥土へ去つたようにしか思えない。おそらくそうであろう。とすれば、このままこの小屋にいるかぎり、源四郎の魂もふらふらと冥土へよろめき出てしまひそうだった。

（これはたまらぬ）

と、源四郎ははね起きた。京へ出発するとすれば夜中ながらいまから発とう。この小屋を焼きはらつてしまえ。そうおもつた。

源四郎は、奥へ駆けこみ、行李をひとつかつぎ出してきた。開けた。

そこに、麻地の古びた侍装束がひとそろい、おさめられている。烏帽子もあり、太刀までおさめられている。

（これを着て。――）

左様、これを着て都にのぼろう。死んだ母親がかねがね、

「あの侍装束は、この小屋の宝ぞえ」

といつていたが、なるほど、遊女とその私生児からみれば宝には相違ない。しかしなぜあの萱がこれを持っていたのであろう。

（これはきつと）

と、少年のころ、源四郎はおもった。都の將軍さまの置き形見にちがいない。そのように信じ、そうであればこそ自分は將軍の落胤だとおもっていたが、しかし長ずるにつれてどうやらちがうと思いはじめた。

（これは下級の青侍あおさむらいの装束らしい）

そう思いはじめた。山ぐらしながら、源四郎は、谷むこうの青岩寺で学問もならったし、那智の山伏やまふじから刀術も学び、諸方の山伏から世間ばなしをきいて、山ぐらしの若者とは思えぬほどに世間智もある。服装による侍の階級も、なんとなくわかつていた。

（太刀ひとつでもそうだ）

銅あかがねごしらえの武骨なものである。こんなものを將軍がもっているはずがない。

ともあれ、それをつけた。

戸外に出ると、そのあたりの枯草を軒下に積みあげ、タイマツの火を移した。みるみる炎が成長し、やがて轟ごうつと音をたてて小屋をつつんだとき、源四郎は、

「わっ」

と、火にむかって哭ないた。哭きつつ坂を駆け降り、ついにふりむかなかった。途中、何度かエリガミをつかんでひきもとそうとする者があつたが、そのつどこの中世の若者は般若心經はんにやしんきやうを大声で誦ずすることによってふりはらいふり切り、最後には剣をぬいて背後なる者を斬った。それでも追ってくる。

まだ夜があけない。

街道は道というようなものでなく、細い溪流の河原かわらづたいの道である。

ひらっ

と飛ぶ。岩から岩へ。

天に樹木がかさなり、視野はまっくろだが、山に馴れたこの若者にはさほどの不自由がない。瀬の音をきき、耳である。音変りのするところが岩場である。

足の裏が、岩から岩へ飛んでゆく。

ややひろい砂地にわらじがついたとき、瞬間、空気がかわった。

というしかない。

例を、水中の魚にたとえるべきであろう。魚は、水圧の変化で外敵を感じる。人が水中に手を入れてつかもうとすればその手の存在を水の圧で感じ、ひらりと避けてしまう。源四郎の場合も、そうであった。この男の皮膚が、異変を感じさせた。

右へ飛んだ。棒が、その頭上をうなりつつ過ぎた。

「物怪ものけえっ」

と、悲鳴のように叫ぶ声が背後でおこり、二ノ棒、三ノ棒が飛んできた。

「ちがう、おれは人だ」

と、源四郎があわただしく叫ばねばならぬほど、その棒はするどかった。

幸い、天が銀色にかわった。夜が明けそめ、杉のこずえの新葉がきらきらかがやきはじめるころ、互いに相手がわかった。

岩場の上に、大男の山伏が立っている。源四郎は下から仰いだ。

「どうぞ」

と、この若者は微笑をふくみ、下の座敷にでも招じ入れるようないんぎんさで、自分を殺そうとした怪人にいった。下へおりてこい、というのである。

「ご遠慮には、およびませんよ」

言葉づかいが丁寧である。なぜならば母親の萱が、この若者が生後立って歩けるようになったころから室町風むろまちふうの行儀作法と言葉づかいをさんさんに教えこんだ。このため、野性と典雅さのいいまじったふしぎな若者ができてしまっている。

「なにを怖れていらっしゃる。私にはあなたを殺め奉るような、そういう心はございませぬ」

「妙なやつだ」

山伏も安堵したのだろう、腹を搔かきながらなおも用心ぶかく見た。

「お前の名は、なんだ」

「弱いほうから、名乗るべきでしょう」

「弱い？」

山伏は、むっとしたらしい。しかしながら思いなおしてみずから名乗った。

「腹大夫だ」

若者は、笑いだした。なるほど、腹が布袋はていのように大きい。

「山伏のような名ではありませぬな」

「山伏ではないからさ」

男は、飛びおりた。

存外若い男である。二十六七か。

「旅をするのに、この装束が便利だからよ。おぬし、どこへゆく」

「京へ」

「ああ、おれもだ。京で一旗あげにゆく」

「なんの旗を」

「インジの大将さ」

印地というのは、やくざ者というほどの意味である。京のみだれにつけこんで印地の大将になろうとしているらしい。

（印地の大将に）

源四郎は後年のかれのような、そういう世間通ではなかったから、このときさほどには思わなかったが、じつにおかしい。

この腹大夫は、あぶれ者の大将になるために京に出てゆくというのである。世の中にそういう馬鹿がいるだろうか。

「なぜ印地の大将などになろうとおもったのです」

と、河原の道をくだりながらきいた。腹大夫は大声で笑った。

「おまえ、都の様子を知らぬな」

「とは？」

「いまは都はあぶれ者の天下さ」

腹大夫のいうところでは、いまの都は四つの勢力がうごかしているという。

「四つとは？」

「まず土倉さ」

土倉とは質屋のことである。江戸時代の質屋とくらべれば比較にならぬほど巨大な存在で、大名から庶民にいたるまでの幅広い金融活動をかれらはしている。

が、これより強い存在は一揆の大將であろう。腹大夫にいわせると一揆の大將が第二番目の存在である。都のなかや郊外で間断なく一揆がおこり、かれらは徳政（借金棒引き令）を幕府に強要したり、土倉を襲撃してその質草を強奪したりしているが、その庶民の武装蜂起の専門的な指導者が一揆大將といわれる連中だった。

「最後は將軍と管領（かんりょう）（首相といふべきか）だよ」

「三番目はなんです」

「それさ、それが印地の大將よ」

印地の大將は平素は子分をあつめてばくちを打ったりしているが、いったん戦乱があつたりするとどちらかの側に金で買われ、足輕を提供するのだという。

「足輕とはなんです」

「ほう、足輕を知らぬのか」

いまの流行語のようなものだ。こんにちでは戦争の実体がかわり、鎌倉風の騎馬戦、一騎打ち